



Title	開拓使期建設の玉蜀黍庫の建築的考察
Author(s)	池上, 重康
Citation	北海道大学大学文書館年報, 13, 34-47
Issue Date	2018-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70345
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARHUA_13_002_p34-47.pdf



< 研究ノート >

開拓使期建設の玉蜀黍庫の建築的考察

池上 重康

はじめに

北海道大学「旧札幌農学校第2農場」敷地内にある穀物庫（写真1）は、1877（明治10）年に建築されたとされる札幌農学校農饗園^{とうもろこし}玉蜀黍庫を1911（明治44）年に現在地に移転改築したもので、そのバルーンフレーム構法を用いる建築的特徴から国の重要文化財に指定されている。この建物については、これまで越野武による簡単な報告¹⁾がある程度で、遺構と関連史料を比較検討した建築的な考察は行われずにいた。本稿は、開拓使が購入した舶載農業書、同時期に建築された勸業課一号園内の玉蜀黍庫関連の資料と、現存の遺構に関するいくつかの資料とを比較検討し、創建時の札幌農学校農饗園玉蜀黍庫を復元的に考察するものである。



写真1 旧札幌農学校第2農場穀物庫外観

1. 札幌農学校農饗園玉蜀黍庫の建設経緯と概要

札幌農学校農饗園玉蜀黍庫（以下、農饗園玉蜀黍庫と略）は、1877（明治10）年10月に竣工したと前掲の越野の報告をはじめ多くの文献で指摘されてきたが、御雇外国人教師ブルックス（Brooks, William P.）から開拓大書記官堀基に提出された書簡²⁾からは、この時点では、未だ建築一件書類が一通り揃い、工費見積りが完了し、建設許可を願い出ているだけであることがわかる。

「 千八百七十七年十月六日於札幌
開拓大書記官堀基閣下

今般校園内へ建設セントス玉蜀黍貯蔵房ニ関シタル図面、仕様書并入費算定書等貴下ノ承諾ヲ得ン為ニ余ハ茲ニ呈ス 但建設費ハ校園定額ヲ以テ之レニ支給スベキナリ 敬具

校園監督

ウルリヤム、ピ、ブロークス」

しかし、以下に示す、翌1878（明治11）年3月発行の『札幌農學第二年報』³⁾にある「玉蜀黍貯蔵場」の報告からは、この時点で既に竣工していた可能性と、未だ建築中（あるいは建築予定）で仕様書から概要を報告している可能性の両面を読み取りうる。いずれにせよ、1877年10月に竣工していないことは明らかである。

「玉蜀黍貯蔵場」

凡ソ作物ハ之ヲ貯蔵スルノ便アリテ收穫ノ後ニ於テ毫モ耗損ナカラシムルハ実ニ經濟ノ要旨トス是レ余カ玉蜀黍ノ貯蔵場ヲ設ケシ所以ニシテ最モ此目的ニ適フ者ト為ス所ナリ其家作ハ米国風ニ之ヲ築造シ柱ノ長ケハ十五英尺ニシテ幅四十英尺長サ三十英尺トス而シテ一尺四方ニシテ長ケ七英尺ノ十六本ノ石柱ニ之レヲ据ヘ其柱ヲ地ニ入ル、コト四英尺ニシテ厚サ二英寸方二尺ノ板ヲ以テ其笠木トナシ之ニ幅五英寸ノ鉄板ヲ蔽ヒ其鉄板ノ端ハ笠木ノ下端ヨリ三英寸突出スル如クシ出入ノ櫓子ハ取脱シ自由ナラシメ不用ノ時ハ常ニ之レヲ離シ置クコトナリ鼠、野兎ノ如キハ石柱ニ登リ且ツ其上ヲ蔽ヒタル笠木ヲ脩ル能ハサレハ此玉蜀黍貯蔵場ニ入ルヲ得ス極メテ便利ノ方法ナリ其外面ノ下見ハ家畜房ト同様ニシテ其室内ハ之ヲ二床ニ分チ階上ノ床ト階下ノ床トノ相距離十二英尺ナリ其階下ハ玉蜀黍ノ貯蔵ニ供セン為メノ函ヲ置キ階上ハ玉蜀黍ノ種子、小麦、燕麦、大麦及ヒ牧草種子ノ如キモノ并ニ其他ノ作物等ヲ納ル、所トス玉蜀黍貯蔵匣ノ側面ハ一英寸ト四分ノ三ノ厚キ板ヲ一英寸ノ四分ノ三隔ニ張詰メテ之ヲ作り其基底部分モ亦タ同様ノ板ヲ四英寸ノ桁ニ釘着シテ以テ空氣透徹ノ便ヲ得セシメ且ツ此家ノ両端ノ壁板ハ六枚丈ケ蝶鉸ヲ附ケテ以テ何時ニテモ之ヲ開放スルニ便ニシ空氣ノ流通ヲ自由ナラシムルニ供シ又タ窓モ之ヲ開ケハ其流通最モ好カラシコトヲ計リタリ其家ハ以テ二千「ブツシユル」ノ玉蜀黍ト其他ノ穀物数百「ブツシユル」トヲ納シ又タ各類多量ノ種子ヲ蔵スヘキノミナラス階下ニハ玉蜀黍皮ヲ剥クヘキノ用ニ供セン為メ又タ便宜ノ室ヲ有ス」

この報告の原文⁴⁾は英語で、翻訳中に明らかな間違いがあるので、まず、訂正しておきたい。玉蜀黍貯蔵函の側面（壁）は「一英寸ト四分ノ三ノ厚キ板ヲ一英寸ノ四分ノ三隔ニ張詰メテ之ヲ作り」とあるが、原文では“The walls of the bins for corn are all made of strips three inches wide and one and one-half inches thick, which are placed three-fourth of an inch apart.”なので、「幅3インチ×厚1.5インチの板を3/4インチの隙間を空けて張り詰める」が正しい。

ここで、この報告から読み取れる農園玉蜀黍庫の建築的特徴の概略をまとめておきたい。

- i) 基本的な建築構造は日本在来の伝統工法ではなく、アメリカに倣ったものとする。
- ii) 梁間30フィート×桁行40フィートで、軒桁までの高さは15フィート。

- iii) 1尺四方、長さ7フィートの束石16本により支持される。
- iv) 束石は4フィートを地中に入れ、上部に2尺四方で厚さ2インチの厚板を笠木として据え、その周囲を鉄板で覆い、鼠と野兎（原文では rats and mice）の侵入を防ぐ。
- v) 加えて、出入口には着脱可能な梯子を設置する。
- vi) 外壁（訳文では下見とあるが原文では outer covering）の仕上げは家畜房に倣う。
- vii) 室内は二層に分かれ、フロアレベルの差は12フィート。
- viii) 一階にある玉蜀黍貯蔵函の壁は幅3インチ×厚1.5インチの板を3/4インチの隙間を空けた簀状のものとし、床もまた、同様の仕上げとして、通風を考慮する。
- ix) 両側面の壁板のうち6枚は、通風のために蝶番で開くようにする。

2. 開拓使舶載農業書にみる玉蜀黍庫

開拓使が購入した洋書⁵⁾を精査したところ、玉蜀黍庫に関する図版と記述が2冊の図書に見つかったので、各々紹介したい。いずれも、Thomas, J. J., *Illustrated Annual Register of Rural Affairs*.で、Vol.V と Vol.VII に“Corn-House”として紹介されている⁶⁾。

Vol.V に“PLAN OF A CORN-HOUSE”と紹介される玉蜀黍庫（図1）には、詳細な解説が書かれているので、それを訳出することで説明に代えたい。

「私はあなたたちに我々が3年前に建て、未だかつて鼠が侵入したことの無い玉蜀黍庫のラフスケッチを示す。床面（底）が地面に接していないことがわかるだろう—結果として、搬入のために床（地面）に砂利を敷く—これが鼠から函を守る唯一の方法である。函は両側4本ずつの8本の束の上に建つ。これらは直径8インチで、長さは2フィート10インチ、上部16インチはブリキを巻いて、2フィート四方で6インチ厚の石の基礎の上に建つ。各々の束の上端には鞍が載る。まるで壁の上に載っているかのように堅固に建つ。妻面は隙間を目板打ちした縦長の板で覆われる。側面には2.5インチ幅のよろい板が3/4インチの隙間で縦に張られる。内部のよろい板は外部と違い、水平に張られる。」

この玉蜀黍庫は、ワゴンでそのまま乗り入れられる仕様で、中央がワゴン用通路で両脇を玉蜀黍函としているため、この点に関しては、農饗園玉蜀黍庫とは大きく異なる。とはいえ、隙間を空けたよろい板の張り方など類似点も認められる。

次に Vol.VII に“Corn-House”として紹介される玉蜀黍庫（図2）について、こちらも解説文を訳出する。

「(鼠害から穀物を守る) 最も一般的な解決法は、玉蜀黍庫を(家畜房から) 離して建てることである。ここでは、鼠は建物に設置された、短く、丸く、重くて耐久性がある束により締め出される。それぞれの束はブリキで覆われ、上端にはワイヤーリムをカットしたブリキの皿を逆さまに置く。建物中央を通路が抜け、函は両端に配置される。函は上から充填する。」

この玉蜀黍庫は、規模こそ小さいものの、農覺園玉蜀黍庫と同様に束の上に建ち、鼠の侵入を防ぐ工夫がなされている。スケッチからは外壁は豎羽目であることが読み取れる。

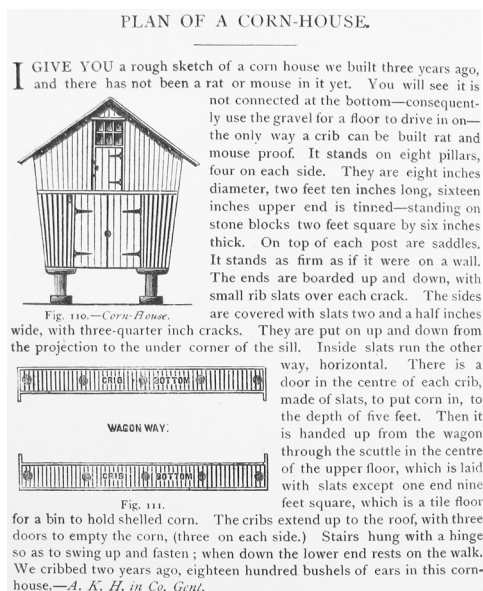


図1 “PLAN OF A CORN-HOUSE”

(Thomas, J. J., *Illustrated Annual Register of Rural Affairs*. Vol.V)

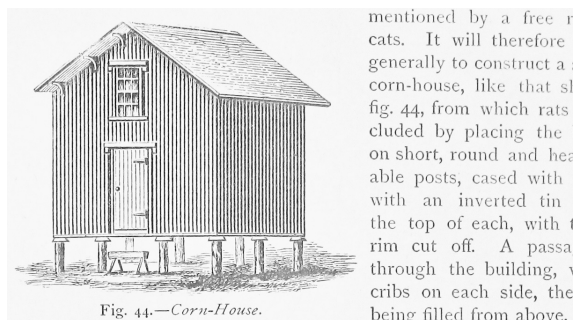


図2 “Corn-House” (Thomas, ditto, Vol.VII)

3. 勸業課一号園の玉蜀黍庫

勸業課一号園の玉蜀黍庫（以後、一号園玉蜀黍庫）は、開拓使工業局作成の図面と仕様書⁷⁾が現存している。かつ、札幌県時代に札幌育種場となった後、1886（明治19）年に札幌農学校に移管され、第1農場の玉蜀黍庫となり、1904（明治37）年に現在の中央食堂付近に移築した際の在来平面図が記録として残っている。『開拓使事業報告』⁸⁾によると、一号園玉蜀黍庫は、1877（明治10）年8月起工、11月竣工と記録されている。農覺園玉蜀黍庫と同年だが、こちらの方が若干早く竣工したことになる。

本稿文末に添付の仕様書の読み下しおよび仕様書に合綴の立面図（図3）と平面図（図4）から得られる建築的特徴を簡単にまとめておきたい。

- i) 梁間8間（48尺）×桁行10.5間（63尺）で、地面から束石上端まで3尺、束石上端から軒桁上端まで16尺。屋根は切妻で6寸勾配。ただし立面図では7寸勾配と記される。
- ii) 束石は1尺×1.5尺で、長さが5尺だが、具体的な本数の記載はない。立面図から、梁間方向には柱位置に合わせて6本立てていることが確認でき、桁行方向は平面図

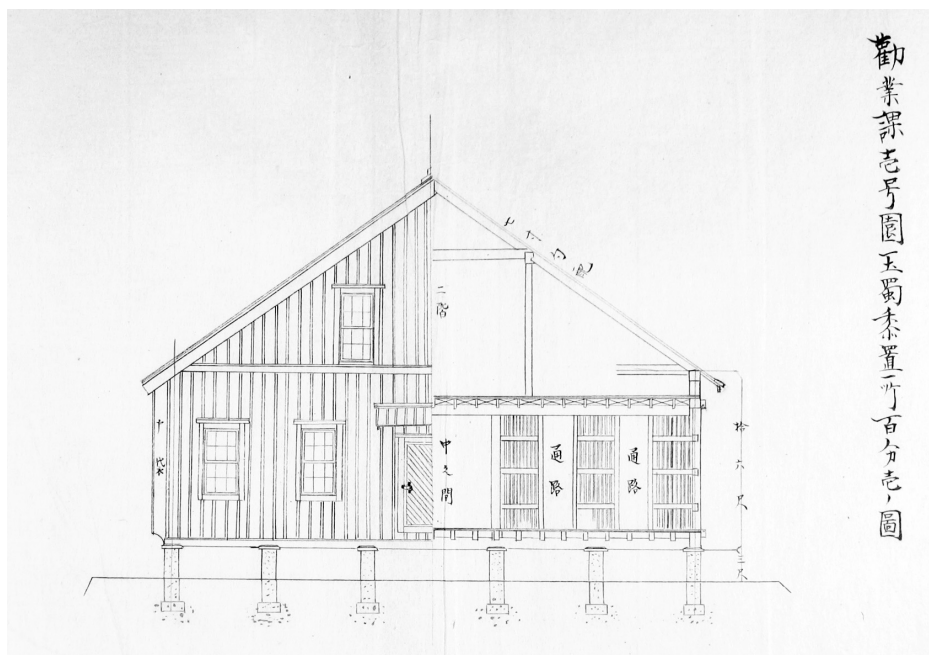


図3 「勸業課壺号園玉蜀黍置所百分壺ノ図」(北海道大学附属図書館北方資料室所蔵)

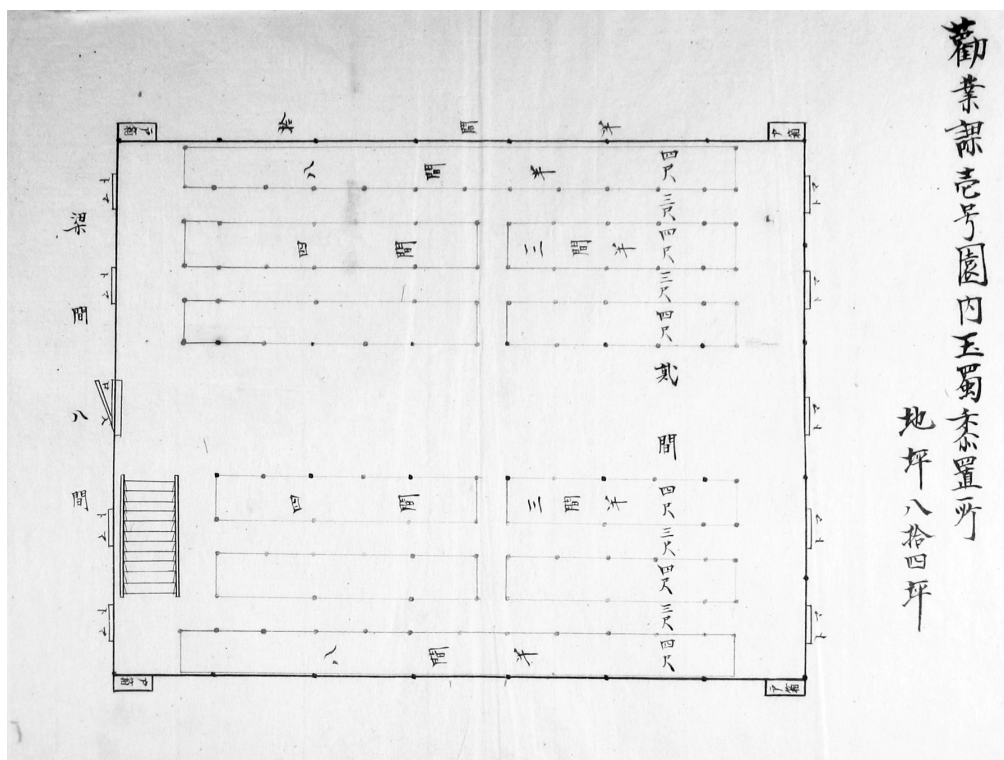


図4 「勸業課壺号園玉蜀黍置所」平面図（北海道大学附属図書館北方資料室所蔵）

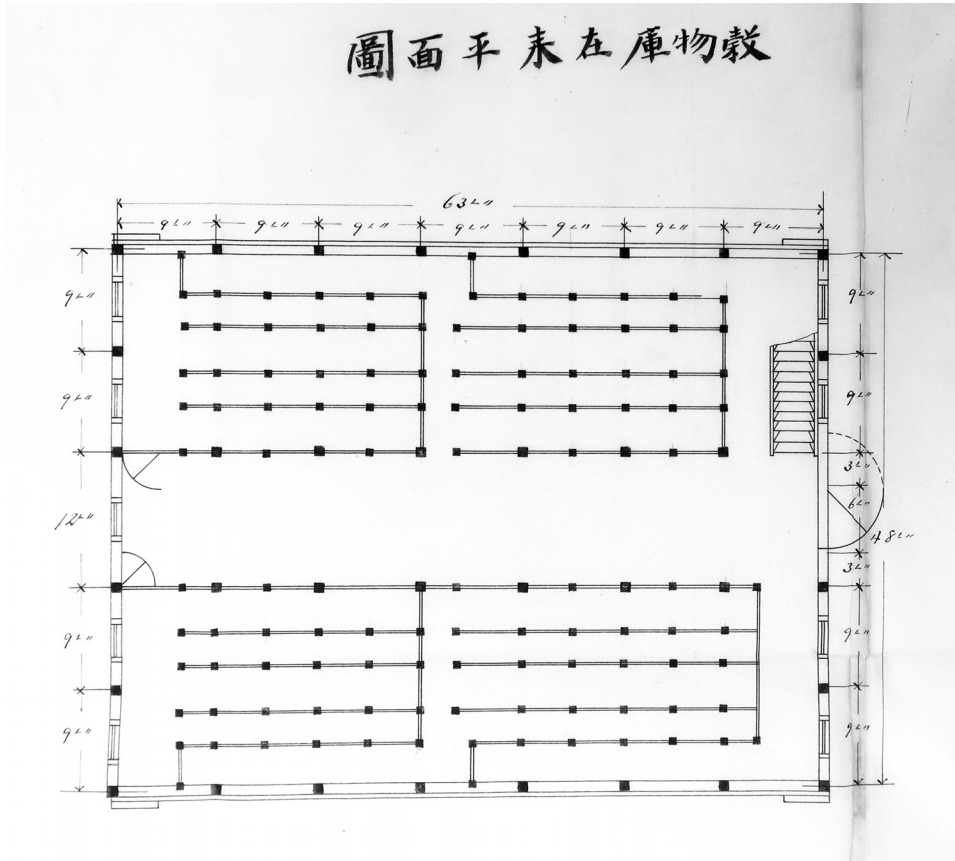


図5 「穀物庫在来平面図」（北海道大学大学文書館所蔵）

から9尺スパンで柱を配置しており、その下に束石を配置したと考えれば、総計48本の束石が立っていたと推定できる。

- iii) 束石は2尺を地中に入れ、上部に鼠返しとして鉄板を巻いた厚さ4寸の冠板を載せる。
- iv) 土台は8寸角で、束石上の冠板に8分欠きで据え付ける。
- v) 主な構造部材の寸法は以下の通り。柱は7.5寸角、胴差は成8寸×幅7寸、敷梁は成1尺×幅8寸、二階梁は成8寸×幅7寸、二階管柱は6寸角、管柱上の桁は成8寸×幅7寸、棟木は成1尺×幅5寸、垂木は成8寸×幅1寸8分で2尺間隔に配置し、屋根葺材には水車曳きの器械桁を用いる。
- vi) 床の根太は成8寸×幅3寸で土台へ3分欠きとし2尺間隔に渡す。床板は下地に幅1尺×厚8分の板を釘打ちし、その上に幅5寸×厚1寸2分の上板を実矧ぎで継ぎ釘打ちして敷き詰める。
- vii) 二階床の根太は成8寸×幅2寸で2尺間隔に配置し、根太の間には2寸×1寸の振れ止め用の櫓（cross bridging）を釘打ちする。図3の右半分の断面表示部分の2

階床下に見られる襻がそれである。

viii) 外壁は8分幅の板を豎羽目に張り、2寸5分幅の目打板で押さえる。

ix) 室内の玉蜀黍囲所(貯蔵函)は平面図に示す位置に4.5寸角の小柱を立て、胴差を渡し、断面図に見るように縦長の板(寸法の記載なし)を8分の隙間を空けて釘打ちする。

移転改築前の平面図(図5)には、玉蜀黍貯蔵函の壁配置が異なるものの小柱の配置が明示されている。梁間方向は中央を12尺スパン、両端を18尺スパンとし、桁行方向は9尺スパンのグリッドに7.5寸角の管柱を配置し、それ以外は4.5寸角の小柱を立てていたことがわかる。

4. 農覺園玉蜀黍庫の復元的考察

越野武は前掲報告で「移築を経た現状が、外観の意匠以外はほとんど旧時と変更されていない」と指摘しているが、実測図と『札幌農覺第二年報』の記述とを比較しての結果に過ぎない。幸い、農覺園玉蜀黍庫についても、移転改築時の設計図面(図6)があり、図面中「在来」の書き込みから、柱を除き、主要構造部材と玉蜀黍貯蔵函の壁部材は当初材をそのまま用いていることが読み取れる。旧材をそのまま用いている部材は、棟木、檼、カラービーム、野地板、軒桁、陸梁、軒桁を支持する方杖、陸梁を支持する方杖、二階床板、二階床梁、二階床根太、振れ止めの襻(cross bridging)、一階窓の楣と窓台、出入口の楣、玉蜀黍函の小柱と簀状の羽目板、構造体の孕みを防止する胴差に緊結するボルト、一階床の根太、一階床梁である。従って、構造体はほぼ旧状を留めていると判断できる。更に、玉蜀黍貯蔵函仕切り壁の内側を隙間のある横羽目、外側を同様の豎羽目とする仕様が、開拓使舶載農業書に記述される仕様と同等であることは注目に値する。

次いで、移築前の旧写真2枚から、外観の復元を試みたい。1枚は西5丁目通りから見た第2農場(写真2)で、正面と左側面が見える。現状と大きく異なる点は、正面2階の窓で、現状が二つあるのに対し、移築前は一つであることがわかる。また左側面は胴差に庇を掛けた仕様で、現状と大差ないと考えうる。もう1枚は北面から見た写真(写真3)で、右側面と束石の詳細が確認できる。外壁は全て豎羽目であり、一号園玉蜀黍庫と同様に目打板を張っているように見える。6ヶ所ある通風用の蝶番付きの板は、縦長の片開き扉であった。束石は、梁間は10尺毎に4本、桁行は約13.3尺(ヤード法に換算すると13フィート4インチ)毎に4本の計16本を立てていることがわかる。

また、『国有財産沿革附録』⁹⁾所載の札幌同窓会からの寄付台帳の図面(図7)には、一号園玉蜀黍庫と同様に、4列の玉蜀黍貯蔵函があったことが読み取れる。

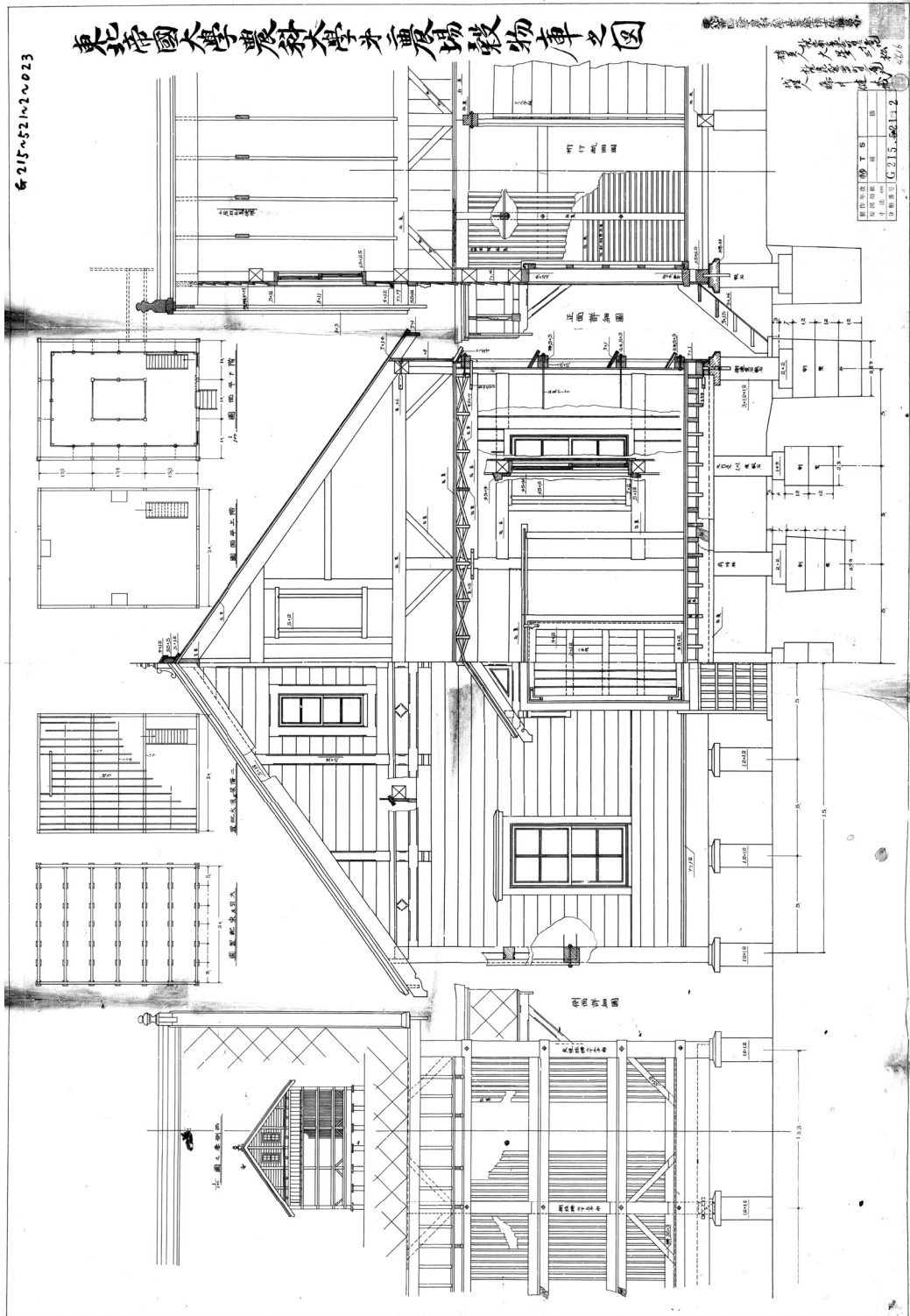


図6 「東北帝國大學農科大學第二農場穀物庫之図」（北海道大學大學文書館所藏）



写真2 西5丁目通りから見た農饗園の模範家畜房と玉蜀黍庫（北海道大学大学文書館所蔵）

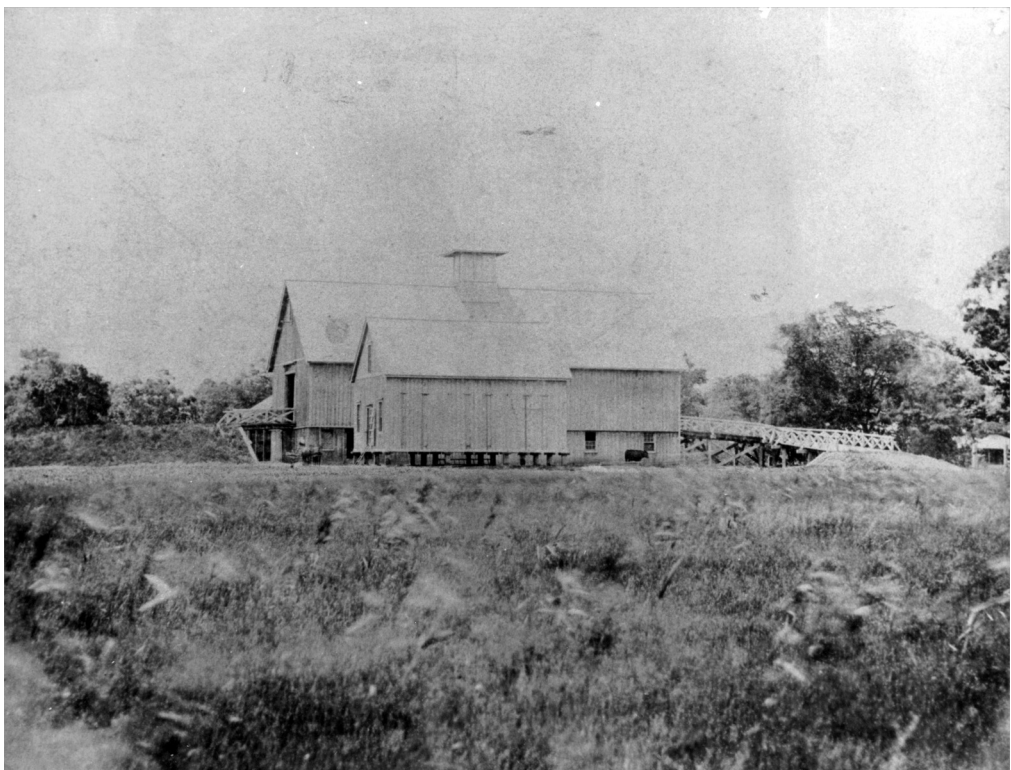


写真3 北から見た玉蜀黍庫と模範家畜房（北海道大学大学文書館所蔵）

むすび

以上、同時代の玉蜀黍庫に関連する資料との比較を通して、農覺園玉蜀黍庫の復元的考察を行った。最後に、現時点で推測しうる建築的特徴をまとめて、むすびとしたい。

- i) 主要構造体は柱を除き、ほぼ当初材を再利用している。特に小屋組の板状の極材や、それを繋ぎ止めるカラービームはバルーンフレーミングに特徴的な構造で、アメリカ風の造作といえる。一階や二階の根太にも同様に板材の根太が確認できる。一方で、二階床下に備えられた振れ止めの襜（cross bridging）は元来ドイツ伝来の仕様であり、アメリカ風とは言い難い。しかしながら、アメリカ経由で札幌（日本）に伝来したのは疑いないであろう。
- ii) 鼠害を防止するために採用された束石は、現状では1尺2寸角の軟石が49本立つが、当初は1寸角のものが、梁間が10尺スパン、桁行が約10.3尺スパンで配置されたため、わずか16本で支持するに過ぎなかった。開拓使舶載農業書に記載の Corn-House でも規模が小さいとはいえ同様に少ない本数の束で上部構造を支持していた。一号園玉蜀黍庫では、原則9尺スパンで束石を配置したと考えられるため48本で支持したと推察した。ほぼ同時期に竣工したにもかかわらず、床下の支持構造体の相違の理由は明快ではない。いずれにせよ、同じ石材を用い、鉄板の鼠返しを設けており、出入口の梯子も不要時には取り外せるものとしている点では共通している。
- iii) 玉蜀黍庫内部の玉蜀黍貯蔵函は、いずれの玉蜀黍庫でも設けられていた。とりわけ仕切り壁を簀状の羽目板としている点が開拓使舶載農業書も含め共通しているのは特筆に値する。ただし、農覺園玉蜀黍庫のみ、床も同様の簀張りとしている。また、岩手県雫石市の小岩井農場にも同様の玉蜀黍庫が現存しており、かつ玉蜀黍貯蔵函も当初の状態で残っているため、今後、比較考察が望まれる。
- iv) 外壁は、原則目板打ちの豎羽目であるが、農覺園玉蜀黍庫のみ側面を胴差に庇を掛け簀状の豎羽目を外面に露わにする仕様と、豎羽目の一部を蝶番留めの扉とし換気を図る仕様が見られた。この仕様は開拓使舶載農業書には確認できていなく、一層の資料の博搜が求められる。

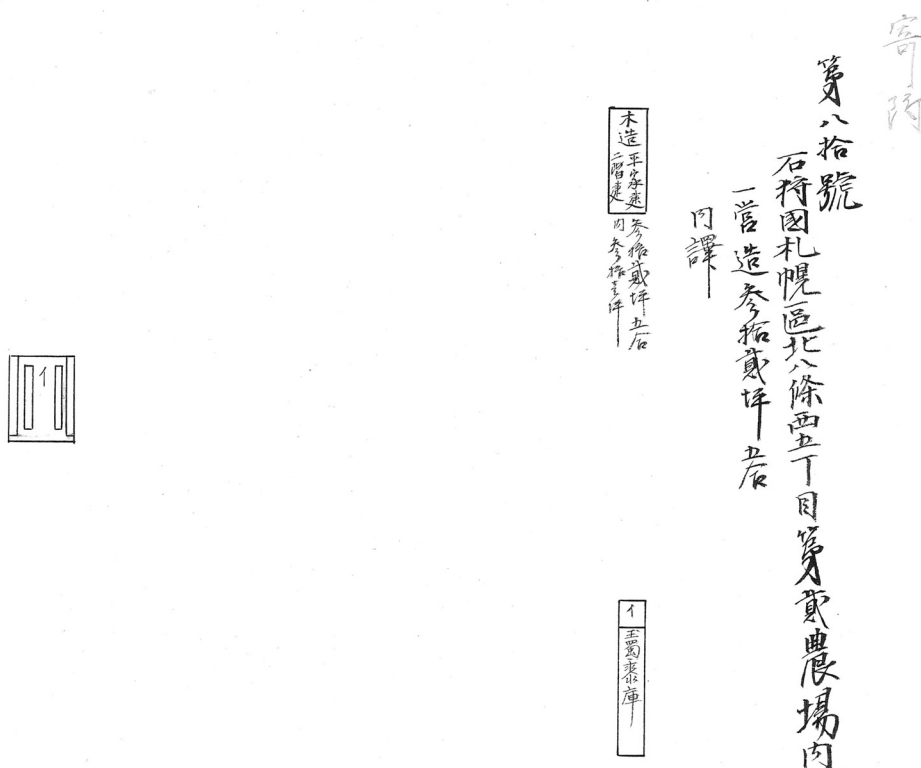


図7 玉蜀黍庫平面図 (北海道大学事務局所蔵『北海道大学国有財産沿革附録』所載)

[注]

- 1) 越野武「北大第二農場穀物庫 (明治10年) について」、日本建築学会論文報告集、第103号、p.470、1964年。
- 2) 「明治十年 外国人贈答録 外事課」(北海道立文書館所蔵)。なお、原文は英語 (北海道大学附属図書館北方資料室所蔵ブルックス書簡023) で以下の通り。

Sapporo, Oct.6 th 1877.

Kaitaku Daishikokuwan,

Hori Motoii ;

Sir ;

I submit herewith, for your approval, plans, specifications and a contractor's estimations of the cost of a proposed Corn Barn, to be built on the College Farm, and to be paid for out of the regular appropriation for said farm.

I have the honor to remain Sir ;

Your obedient servant

Wm. P. Brooks

Superintendent Sapporo College Farm

- 3) 開拓使『明治十一年三月 札幌農養第二年報』、pp.96-98。

- 4) *Second Annual Report of Sapporo Agricultural Collage 1878*. Tokei published by Kaitakushi, pp.69-70.
- 5) 開拓使購求の舶載建築書については、拙著『明治初期日本政府蒐集舶載建築書の研究』（北海道大学出版会、2011年）で一覧を示し、移管経緯を考察している。
- 6) Thomas, J. J., *Illustrated Annual Register of Rural Affairs*. Luther Tucker & son, Vol. V, 1867-8-9, p. 190 and Vol.VII, 1873-4-5, p. 159.
- 7) 北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- 8) 大蔵省『明治十八年十一月刊行 開拓使事業報告第二編 勸業・土木』所載の「家屋表」より。
- 9) 『北海道大学国有財産沿革附録 二冊ノ内其二』（北海道大学事務局所蔵）。

（いけがみ しげやす／北海道大学大学院工学研究院助教）

《卷末資料》玉蜀黍庫仕様書

勸業課壺号園内玉蜀黍囲庫壺棟新築仕様帳

工業局

営繕課

勸業課壺号園内玉蜀黍囲庫壺棟新築仕様書

一 桁行 拾間五分 一棟 玉蜀黍囲庫石束椽下
梁間 八間 吹抜キ二階造り屋根切り
妻器械桁葺

軒高地盤ヨリ石上ハエ三尺

石上ハヨリ桁上端マテ壺丈六尺

軒出側軒共出貳尺五寸

屋根勾配壺尺ニ付六寸勾

此建坪八拾四坪也

右仕様建地水準ノ上盛土平均六寸高二踏メ石束四拾八ヶ所上口三尺五寸方深盤土マテ平均四尺五寸見込ミヲ以テ根伐土彫上テ川砂利入小蛸ニ而段々メニ壺ヶ所砂利壺合貳勾五才ツ、遣ニテ突堅メ地盤石軟石大サ貳尺方厚壺尺貳寸居付石束長サ五尺^{壺尺}地上三尺搞仕上モルタル充分入合切居付廻リ砂利割栗ヲ以突堅メ埋立内拾貳ヶ所ハ同石地盤ノ上切上ヶ壺尺四寸方厚壺尺地中ヨリ五重モルタルヲ以合口念入積重子廻リ前同断ニ埋堅水準ニ依リ上端切揃太柄穴彫

一 鼠返シ冠板雜木厚四寸大サ石束三寸翻同木太柄立居合廻リ鍍板打廻シ石束銘々ニ取付

一 土台雜木挽立八寸角継手追懸大栓貳本打隅々小根帯打抜キ楔メ仕切土台継手同断側土台エ平柄ニ差合冠板エ八分掛リ居付

一 側柱中柱共同木七寸五分角上下柄付側胴差同木^同胴縁チ同^同共建込ミニ差合二階中敷梁同木^同二階梁^同継手追懸大栓ニ継合柱エ差鎖リ曳鍍長延貳尺五寸^同柱大脊ヨリ二階梁下端エ曳付大鍍鉾ヶ所八本打軒桁椽七寸角継手同断穴彫^同合妻梁同断ニシテ置合二階上管柱椽押六寸角二ノ桁同木^同極彫前同断置渡シ棟木同木^同継手前同断独古束立極穴彫置渡シ極椽^{八分}貳尺マニ軒桁エ仕合軒出木造り削リ打渡シ上ハ蛇口柄ニ致シ正四寸五分釘打鼻隠シ板椽^{五寸二分}広木舞同^{六寸五分}品板トモ同断削三寸釘ニテ打渡シ極形同木^{貳寸}同取付裏板同^同正貳寸釘板巾四本打屋根水車製器械桁貳寸五分足軒葺止メ共切板貳枚葺泥障板^{八寸}木棟椽削立七寸各外ニ小返リ取付胴腹込栓打

一 床カ根太椽^{三寸}継手目違入土台エ三分掛リ貳尺間ニ置渡シ正四寸五分釘打床カ板同木^同正貳寸釘打上板同木^{五寸五分}実矧ニメ正三寸釘貳本打ニ張合

一 二階根太椽^{三寸}貳尺間ニ前同断置渡シ根太間襷キ同^同正貳寸五分釘ニテ打付二階板張

方共下床カ同断上リ口物揚口共雑櫓ノ内^{三寸}削り框差廻シ取付物上口之方櫓厚^{一寸五分}板上ケ板出来取付

一 側廻り立羽目^{八分}板片面削り両傍取正式寸釘打目板同板巾^{式寸五分}挽割三寸釘巾^{式寸五分}本打桁^{面戸ハ桁外面ヨリ裏板迄}極^廻キ合同板ニテ打付附土台板^{繼押}附桁^{附極}共^廻寸^{六分}削り目板^{搔合}四寸五分釘打

一 上下硝子窓 ^{高内法六尺一寸}宛 拾三ヶ所

楣^雑寸^{五分}窓^桢寸^四戸^決り附溝共仕合内ノ方止メニ切合^柄差ニ打立通常六枚硝子入障子^{パテ塗}ニテ建合釣鉄巴^鍍共取付ケ工合能建合

一 入口 ^{高内法七尺} 壹ヶ所

楣^雑寸^{五分}差合栓^{打口}桢前同断下桢^雑木ヲ以テ柄^差ニ打立戸^決り致扉^框寸^{八分}廻り板^決り柄^差ニテ中^棧同木^{三寸五分}通^り入打立上下ハ小根^柄ニテ楔^メ堅^メ櫓^{五寸}実^矧ニ^メ筋^違ニ切^合板^巾式寸釘^{式寸五分}打付重三寸五分肘^厚座^鍍付桢^{外側}エ彫^込女^肘面^付四分^{ホート}三ヶ所^{ロール}メニ釣^合締^り輪^掛鍍^請坪^共丈夫ニ打付六寸錠^鍵取付

一 入口^扉 ^{桁長九尺五寸} 壹ヶ所

腕^木寸^五間^柱柄^打拔^キ返^り楔^ヒニテ^メ堅^メ桁^同木^{五寸}關^キ渡^シ板^掛ケ同^{四寸}板^櫓壹寸板^目板^同板^挽割^打極^形ア壹寸^式分^鼻カラミ^櫓壹寸^五分^角板^鼻切^揃打^捺ミ屋^根上^雨押^櫓大^貫取付

一 兩行間雨戸^敷居^雑木^{五寸}溝^突壹間ニ水^抜キ彫^明ケ敷^鍍入^柱毎ニ太^柄立^{六寸}皆折^釘ニテ打付^ケ鴨^居櫓^大サ同断ニ^メ取付^雨切^{小屋}根^櫓壹寸板^小猿^頭式^尺間ニ打取付^板戸^櫓壹寸板^壹尺間ニ合^釘立^矧合^端喰^{三寸三分}下^バ雑^木ヲ用^目違^仕合^式ケ所ツ、柄^打拔^楔メ^胴二^タ通^り筋^鍍ヲ以テ^ハ八^分鏢^鋌ニテ^鍛鎖^り下^棧真^棒至^{壹寸式}分^鍍車^取付^建合

一 戸袋妻板^櫓寸^八削^矧合^蟻棧^{三ヶ所}筭^栓打^胴縁^チ同^{五寸}桢^差ニテ取付上^桁下^押共^同木^{五寸}小^穴突^妻板^エ柄^差合^皿板^櫓壹寸^櫓壹寸^板削^切板^{式寸五分}釘ニテ打付^ケ立^羽目^櫓八^分板^側取^片面^削り^{式寸}釘^打目^板同^板挽^割打^屋根^板同^{壹寸}板^入口^庇シ同断都而^{外側}鋸^削り^出来^之事

一 内玉蜀黍^圃所^図面^ノ通^り小^柱櫓^{四寸五分}角^上下^柄付^ケ胴^縁穴^彫前^側柱^ハ寸^六分^宛溝^突キ^胴縁^同木^{四寸五分}柄^付差^堅メニ致^削り^取建^テ廻^り櫓^{壹寸五分}削^り八^分明^キニ三寸釘ニテ打付前側^横目^透取^置ニ致^小柱^向イ^合之^処ハ^胴中^エ鍍^棒頭^至六^分頭^付モ^{ール}メニ取付都而^鋸削^取建^之事

一 ^長五^{尺七}寸^拾五^段踏 二階上^り口^箱梯^子壹^脚側^板櫓^{三寸}踏^子同断八寸^勺配^ニメ^莖柄^式枚^拔キ^壹段^置蒸^子彫^込打^立裏^板櫓^中貫^削り^目透^シ打^裏押^縁同^{三寸}削^打掛^ケ合

一 ^長四^尺 五^段踏 入口^取置^梯子

仕様木品共前同断銘々柄ニテ裏板無シ出来

一 式^ツ車^物揚^函セヒ 壹^組

引上^網至^{六分}本^麻三^ツ操^長拾^壹丈

裏^網元^網共^同断^至八^分長^八尺^ツ、